

## 問いをもち、願いを明らかにしながら追求意欲を高める子ども

— 小学3年「ふしぎな種からすてきな花がさくよ」の実践から —

### 1 題材のねらい

みんなを笑顔にするすてきな花をつける植物の絵を描く活動において、ふしぎな種の色や形から発想する面白さや、描く花などの特徴と自分の願いとの関わりから、表現方法についての発想や構想を広げたり深めたりしながら、感性を働かせて造形表現を追求することができる。

### 2 授業の構想

#### (1) 子どものとらえについて

本学級の子どもたちは、感性を働かせながら表現テーマや素材などの対象と好奇心旺盛に向き合い、体験したことをいかして自由に試行錯誤を重ね、自分の考えや友だちの取り組みの様子を取り入れながら、表したいことを追求することができる。考えたことや感じたことを文章に表したり図やイラストに表したりすることに長けている子どもも多い。

次の文章は、「ゆめのロボットをつくろう」8時間目の学習活動後の日記である。

今日、図工でゆめのロボットを作りました。わたしは2号目のロボットに手をつけようと思って、長いをセロハンテープで上と下につけてみたけど、はこが重くて、くっつきませんでした。わたしは、どうしたらくっつくかなどいろいろ考えました。けど、はこにあなをあげたら、ものを入れるから出てしまうし、ガムテープでくっつけたら茶色いからだめです。今度いいほうほうが見つかると思います。(児童A)

児童Aは、素材体験をもとにして、作りたいものの色や形、表したいことと照らし合わせながら、よりふさわしい接合方法を試している様子がある。

#### (2) 本題材の内容と図画工作科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて

一人一人が問いをもつとは、自分の考えの価値やよさを拠り所としたり、他者と共有した価値やよさに基づいたりして、自分の造形表現を問い直すことであると考え。そのためには、一人一人の子どもが、表したい事柄について確かな願いをもつこと、その上で、自己の造形表現の目的を達成するために、感性を働かせて自分や他者の造形表現や表現意図に問いかけを行うことが大切である。そして、追求する姿とは、見いだしたことや過去の経験や技能を駆使しながら、目的を達成するために新たな表現を獲得しようとする姿であると考え。自分の取組を認め、他者から表現のよさを認められる中で、自分なりの達成感を味わうことができる造形表現活動の営みの中に見られる姿であると考え。

本題材では、すてきな花の絵を描くに先立って紙粘土で作ったふしぎな色や形の植物の種と出会う。その種の色や形などを手がかりにして表現テーマに沿って考える活動から始める。そして、表現テーマに合わせて一人一人がふしぎな種を形作り、その種からはどのような花などが育つのか、発想を広げたり構想を深めたりしながら、絵に表す活動を行う。先述した本学級の子どもたちの実態を踏まえ、本題材は追求する意欲や態度を引き出すことに適していると言える。

#### (3) 本題材の内容における問いをもち追求する姿を育成するための具体的な手立て等について

自分がどんな追求をしたのかが見えてくるようなふりかえりをする。

導入場面では子どもに教師が作成した「ふしぎな種」を出会わせる。理科の学習で見てきた自然のものとは違う、色も形も派手で特徴的なものである。そのふしぎな種からはどのような花が咲く

のかをみんなで考える活動を設定する時、感性を豊かに働かせて自由な発想のもとで花などの色や形の特徴を追求させたい。

学習のめあては「ふしぎな種から育つ植物やその花が、どんどんおもしろくすてきなものになるように考えよう」とする。活動の終わりにはめあての視点に基づいたふりかえりを行う。そこでのふりかえりは「植物やその花がふしぎな種に負けないくらいおもしろくすてきなものになるように考えることができたか」となる。教師は、このふりかえりの視点に立って、子どもたちに自分の考えや友だちの考えのよさを気付かせ、自分の考えがどのように変わっていったのかを問いかけるようにする。そうすることで、子どもは、この学習活動の中でどのような追求ができたのかをつかみ、自分と友だちの考えや取組を比較したり検証したりすることができる。その中で次の学習活動「自分のふしぎな種を作ろう」への見通しをもち、意欲を高めながら、自らの学びを自覚するに至ると考える。

教師は、前時の子どもの気付きやふりかえりから願いや問いをとらえることで、造形表現への追求をさらに促すようにめあての言葉を修正することができる。違う角度からの視点を示すことも考えられる。

このように、展開計画の基本に従いながら、子どもの願いや問いに沿ってふりかえりとめあてを連動させることで、子どもは学びを自覚するとともに追求意欲を高めることができる。そして、追求したいことについて思考や判断を繰り返し、自他の考えを統合・整理していく。その中で、よりすてきな花を描くための見通しをもち、方法や手順を見付けたり構想を固めたりすることができる。

子どもが気付きを獲得する、素材体験や試行錯誤が十分にできる授業づくりをする。

本題材に於いて、素材体験を味わい、造形表現のための試行錯誤を十分に行いたい場面は幾つか予想される。

まず、教師が示したふしぎな種に対して、子ども一人一人がワークシートにその生長した花などの色や形を幾つか描き表す場面が考えられる。また、粘土を用いて自分だけのふしぎな種を作る場面が考えられる。ふしぎな種を作る場面では、可塑素材の粘土の手触り確かめながら思いのままに作れるようにしたい。考えながら作り、作りながら考えを確かなものにしていく過程を大切にしたい。種は比較的小さなものを想定しているため、使用する粘土の一人あたりの分量は少なく済むが、きめが細かく展性や粘性が高めの紙粘土が望ましいと考える。子どもの感性は豊かであり、教師の想像を超えてしまうことが多い。粘土の良さを生かし、丸める、のばす、紐状にする、ねじる、包む、つまんでとがらせるなど、指先を駆使した細かな表現を見付け出すことを期待している。ここで得られた形への気付きやこだわりが、花などを描く活動場面でも追求を支える根拠の一つになると考える。

これらの活動に於いて彩色をする際は、そこで考えられた色のイメージが、形と同様に、後の花を描く活動場面に於いても考えや気付きの根拠の一つになり得る。

教師は、それぞれの学習場面の中で、子どもの気付きや考えに対してその考えの根拠を深く問うなど、「掘り下げる」はたらきかけを行う。また、子どもの追求意欲を刺激するように多様な見方や考え方を視点という形で示し、子どもの気付きや考えを学習集団全体につなげて行くような、「提案する」はたらきかけを行う。

教師のはたらきかけに伴い、子どもは自分が表したいことについての問いをつかむ。また、記録物や製作物、製作活動を通して、自らの問いと向き合うことで自分自身の表現したいことが明らかになる。これにより、学びの自覚が促され、造形活動に対する意欲が高まり、表したいことに向かって熱心に描こうとする姿、すなわち、追求する姿を引き出すことができると考える。

### 3 展開計画 (全7時間)

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	ひとつの種から考えてみよう。	1	○ふしぎな種に出会い、どんな花に育つか自由に考える (1時間)
		2	○おもしろくてみんなを笑顔にするすてきな花が咲く植物のふしぎな種を作る (0.5時間) ○どんな花が咲くのかイメージしてふしぎな種に色をつける (0.5時間)
2	ふしぎな種から育つすてきな花などを絵に表そう。	3	○ふしぎな種をまいてどんな花に育つか考えながらイメージ文・図やイラスト (ストーリー) に表し、下絵を描く (1時間)
		4	○ふしぎな種から育つすてきな花を絵に表す (1時間)
		5,6	○すてきな花の世界がよく分かるように絵を仕上げる (2時間)
		7	○これまでの活動をふりかえって、考えてきたことや表し方の良さについて作品を見ながらまとめる (1時間)

### 4 授業の実際

教師が、子どもの造形表現への願いを確かなものにするために、子どもの気付きや考えの基になったことを明らかにすることで、子ども自身が自分の考えをしっかりと意識して活動することができた。ふりかえりをする際は活動の具体と自分の願いに視点を当てることで、子どもは次の活動で行いたいことをはっきりと表すことができた。それは、次時間の活動のめあてにつながりうる追求の姿を示すものであった。以下に、その具体を述べていく。

#### (1) 第1次 表現テーマとの出会い

表現テーマの手がかりとして、教師作成のふしぎな形の種に出会う活動を設定した。3年生はこれまでに理科の学習を通して、植物の種や植物の生長を観察してきている。親しみと興味をもってふしぎな形の種に出会うことができた。また、自分で自由に種を形作れることや、そこから育つ花などが自由に想像できることに喜びを感じていた。

教師が示した種 (図1) ひとつについて、「くるくるの形がおもしろい。」「一本ずつほだけそうだ。」と感じたままに話していた。

本題材の表現テーマ「ふしぎな種からすてきな花がさく」ことにしっかりと触れることで、子どもたちは、自分の発想を広げ、考えをはっきりさせながら、造形表現の活動について見通しをもつことができた。以下に示す授業後のふりかえりは、題材の導入時のものである。



図1：教師作成のふしぎな種

今日は、種からどんな木ができるのか予想して紙に書いてみました。先生が作った種の中から一ついい種をえらんで、その種から、自分が思う木を書きました。わたしはぎざぎざの種にして、コンペイトウの木にしました。この実を食べるとしようらいになりたいしよくぎょうの人になれます。もし、こんな木があったら、この木で人を幸せにしたいです。  
(児童B)



図2：イメージ図とイメージ文

児童Bは、表したいことのイメージを文章に書いたり、図に描いたりしてはっきりさせていく中で、自分の考えや願いをはっきりとさせていき、造形表現への意欲を高めている (図2)。

これらの文章や図はポートフォリオとして蓄積させている。常に確認しながら進めることができるので、自分が今何をしたいと願っているのか確かめながら、表したいことをつかんだり、発想を広げる手がかりとしたりすることができる。学びを自覚する上で有効な手立てであった。

第1次では種との出会いの活動を受けて、自作の種を作る活動を行った。その活動に当たっては前時のふりかえりの中で共有した、ふしぎな種や花についての願いを明らかにして進めた。それ

は、「ゆめがかなうこと」や「人を幸せにすること」である。そのために作るふしぎな種が、「自分だけのオリジナルの種」になることなども、めあての言葉を受けて子どもたちから挙げられた。次の文章は、第1次2時間目の授業後の日記である。

今日は、ふしぎな種のべん強で、ふしぎな種を作りました。ふしぎな種は、ふしぎだから「どうやって作ろう。」と思いました。あと、「どんな形にしよう。」と思いました。さいしょは、ハートを作ろうと思いましたが、作れずにハートはかえました。何分かたち、思いつきました。それは、丸の形です。丸に丸をつけました。ぼくは、「ぼくのとっておきのふしぎな種だと思いました。」  
(児童C)

児童Cは好きな人が住める家ができて育つふしぎな種を考え出した。しかし、作りたいことはあっても、そのふしぎな種の形を決めることが上手くできずにいた。他の子どもたちも作りながら形がしっくりいかず、苦戦する様子があった。ここで明らかになったことは、育つ花のイメージや、その形を想起できるふしぎな種の特徴がはっきりしていないことであつた。そこで、この時点ではっきりしていることと、はっきりしていないことを黒板に書き出し、共有することにした。



図3：にじ型と音ぶ型の種

また、イメージ文や簡単な図・イラストを用いて、ふしぎな種から植物が育つストーリーを決めることにした。その結果、次の児童Dのふりかえりのように、形や色の特徴をつかみ取り、ふしぎな種を上手く作ることができた (図3)。

今日は、図工でふしぎな種を作りました。わたしの種は、にじ型と音ぶ型の種です。どっちの種もおもしろいかなう種です。だから、じょうずに色がぬれるといいです。  
(児童D)

今日は、図工でふしぎな種の花に色をつけました。わたしは、さいしょにこい色を作っていたけど、少しくふうしてこい色に白をまぜてうすくしました。そしたらきれいになったので、次もそのくふうで作りたいです。  
(児童D)

#### (2) 第2次 ふしぎな種から育つすてきな花の絵をかく

子どもの必要感から、作品の構想に当たるイメージ文や図を書くことになり、ふしぎな種が育つストーリーを書くことに、第1次の終わりから取り組んだ。当初は、絵を描くための構想に役立てることを期待して第2次に設定していたが、ふしぎな種を形作る場面にも役立てることができた。子どもが過去の経験を生かして取り組んだと言える。

第2次では、作ったふしぎな種を画用紙に貼り付け、そこから育った花などの絵を描く活動を行った。次の文章は、第2次4時間目の授業後の日記である。

今日、図画工作では、ふしぎなたねをうえて絵をかきました。わたしの種は、チョコレートだから、チョコレートの花や、葉や、実にしようと思いました。土はダンボールをはって、その上に、種をはりました。土でくふうしたところは、根です。わたしは、せっかくふしぎな種だから、根もくふうしようと思って、根にもチョコレートをつけてみました。つけてみたら、よりふしぎになって、明るく仕上げるのでよかったです。絵は、くきをふわふわにして、えだの先に、虫よけのシャボン玉をかきました。まだ、全部はかけていないけど、次の時は下絵をかんせいさせて、色をぬっていきたいです。  
(児童B)

児童Bは、ダンボールを土に見立てて、そこにふしぎな種をはることをアイデアとして出していた。植物の根にも工夫をすることで、よりふしぎに、明るく仕上げることができ、取組に満足する様子が見られた。チョコレートが好きなことに関わってどのようにすればよりよく表すことができるかという問いをもち、表したいことに対して追求して行く姿勢がうかがえる。次の文章は、児童Bが、第2次5,6時間目の授業後に書いた日記である。

今日、図工で、ふしぎな種の絵に色をぬりました。わたしの絵は、チョコが小さいから、ぬってみた時に色がチョコからはみ出してしまって大へんだったけど、白い絵の具でぬってみたら、上手に消せたのでよかったです。と中で先生に、「ねがいがかないと書いた人は、お願いしたら何でもかなえてくれるんですか?」と聞かれて、もし、わたしがその種だったら、自分だけの種だから、1ヶ月に1回しかできないとか、とくべつな日にしかできないようにしようと思いました。今日は、絵の具で色をぬって、まだ、全部はできていないけど、集中していっしょうけんめいすることができたので、よかったです。(児童B)

第2次4時間目の子どもの様子から、イメージ文などからとらえた、表したいと考えていることと、実際に描いている絵が合っていないことが見えてきた。教師は、5,6時間目の活動の中で、願いとは、どのようなことが叶うことで、それを絵としてどのように描き表したいかを確認するよう提案したものである。この時、半数の子どもが、イメージ文を見直したり、つけたい色の案を幾つか試したりしている。児童Bも、この提案を自分なりに受け止め、ふしぎな種への思いを更に深めて、丁寧に色を塗り進めることができた。

作品づくりの終わりには、作品を掲示し鑑賞する時間をもった。自由な発想で思い思いに描いた絵を味わい楽しみ、感想を伝え合う姿も見られた。虹の形をしたふしぎな種を植えた地面を、にじ色に表現する子ども(図4)や、ほしいゲーム機の形だけでふしぎな種や植物全体を構成したものなど、そのよさが紹介されていた。



図4：ポートフォリオ(左)、児童D作品(右)

## 5 おわりに

表現テーマと出会い、そのふりかえりから次の学習のめあてへと連続させていくことで、子どもが高い意欲をもちながら造形表現について追求を持続させる。そのような授業づくりに向けて題材を構想した。

そのために、子どもが自分の表現したいことをしっかりつかみ取ること、その表現したいことに近付くために、自分の取組や表現意図に問いをもつことに重点を置いた。

教師が子どもに学びをしっかりと自覚させるためには、子どもが表したいと願っていることの中で、漠然としていることや曖昧になっているものについて、光を当てる必要がある。その光を当てるための関わりが、教師のはたらきかけとしての「掘り下げる」「提案する」ことに当たると考えた。

教師が子どもの学びや授業を評価し、適切なはたらきかけを行うために、子どもの学びを十分にとらえなければならない。そのために、とらえるべき子どもの姿について次の五つの点で整理している。

- ・子どもが題材のどこに思いを向け、どのように感じているか。
- ・自分が受け止めたものを、どのように作ろうと発想しているか。
- ・表したいことのために、材料や用具、表し方などをどのように選びだそうとしているか。
- ・周囲の取組からどのような点のどのようなよさに気付いているか。
- ・表現活動から、以後の自分の造形表現やくらしにつながる可能性に気付いているか。

より具体的な子どもの姿から学びをとらえることで、何を子どもに問うべきか、共通の視点で子どもが考え出すように、どのような揺さぶりをかけるべきかが明らかになる。「掘り下げる」「提案する」ことに中心を据えて教師がはたらきかけを行うことは、子どもに問いを生み出すために有効であった。

「掘り下げる」はたらきかけを行い、子どもが自分の表現意図や心情などと、作品のつながりを意識し、自らの学びを自覚しながら造形表現の追求を進めるようにした。子どもは学びを自覚するほどに、表したい事柄について強い願いをもつようになる。造形表現の活動に対して高い意欲を示し、持続することができる。次の活動へ連続して行くように、活動の見通しをもつことができた。

ふりかえりからめあてにつなげるためには、具体的に何を指すのかということ、ふりかえりの場面に学級全体で明らかにしておく必要がある。学級全体で目指すものが明らかになると、それが次の学習でのめあてに連動しうるものになる。その中で、子どもは、自分の作品に対して何をしたいのかを問いとして再びつかみ、個の追求を持続させることができる。

また、子どもが既習の知識や技能、それまでの経験を生かして造形表現を追求するためには、子どもの必要感に応じて、試したり取捨選択したりする機会を保障することが大切である。必要感そのものを刺激したり、試したいことの幅を広げたりする上で、「提案する」ことは有効である。

授業中、子ども同士の話し合いの場面をよく見るが、子どもは、自分が感じている問いを仲間にあずねて、意見を求めたり、よさを確認したりしていることが分かる。教師は、その様子を捉え、子どもの必要感に応じて、学習展開や教師のはたらきかけを修正しながら、小集団や学級全体にその考えをつなぎ、広げ、確認したり問い直したりする。すると、子どもは、気付きや確信を得て問いに対する一つの答えをもつことができる。子どもの考えは、統合・整理された状態になる。すると、子どもの追求意欲は高まり、高いままに追求が持続する様子が見えてきた。とりわけ子ども同士の関わりで見出したことへの追求意欲は高くなる傾向があり、授業後の休み時間や家庭でも作ったり、考え続けたりしている様子が見られた。

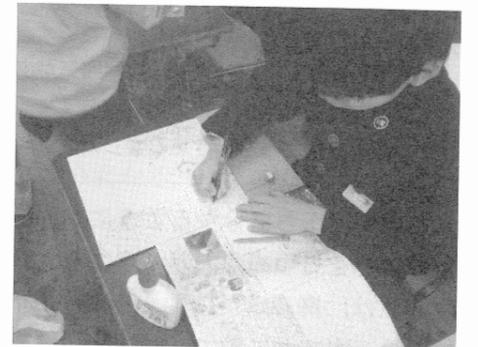


図5：ふりかえりの場面

授業におけるふりかえりの場面は、学級全体での学び合いの一つといえる。「次はどのようにしたいのか」という言葉を用いて子どもの願いを引き出し、共通の視点をもって次への見通しを具体的に考えたことは、子どもが表したいと考えていることに照らし合わされ、多くの発見やつかみ取った発想が取捨選択されながら、有効なものが学びとして残る。このように子どもの個人思考と集団思考の間を問いが往来することで、学びが活性化される。ふりかえりの場面においても、教師の「掘り下げる」「提案する」はたらきかけは有効である(図5)。

図画工作・美術科の授業として、子どもに問いをもたせることをとらえる時、ねらいを十分に考慮し、視点をしっかり絞らなければならないと感じた。子どもの問いが連続することで、追求は持続すると言えるが、それには、子どもの自らの学びに対する自覚や、その学びの深まりがどのようであったかが大切に思われた。

今年度の実践は、ふりかえりからめあてへのつながるように、問いの連続をどのようにもたせるかということであった。子どもの思いや考えが生まれた根拠や、その理由を明らかにするようにした。その上で、ふりかえりに考える視点をもたせることや、子どもにはたらきかけを行い、子どもの願いをより具体的にしていけることが、このような成果を生んだと言える。

(文責 三桐 撰夫)